

聖書：マルコの福音書 6：31～44

説教題：みな、食べて満腹

日時：2025 年 10 月 12 日（朝拝）

前は 30 節までを読みましたので、今日は 31 節からとなります。弟子たちは前、イエス様によって初めて宣教旅行へと遣わされました。その報告をしたのが 30 節です。その彼らにイエス様は 31 節で言われます。「さあ、あなたがただけで、寂しいところへ行って、しばらく休みなさい」と。イエス様はこのように弟子たちを配慮されたということです。ずっと働き続けるのが良いではありません。この時も「出入りする人が多くて、食事をとる時間さえなかったからである」とあります。そんな状態で限界まで奉仕するのが美德であるということではないのです。イエス様ご自身もそうでした。福音書を読むと、繰り返し人々から離れて、一人の時間を持たれ、特に父なる神と祈りの交わりをされました。霊的にも肉体的にも休息を取ることが必要であることを覚えて、イエス様は弟子たちをそのように導かれたのです。そこで彼らは舟に乗り、寂しいところへ行きました。ところがでした。多くの人々はそれに気づき、どの町からも徒歩で、弟子たちが向かった方へと駆け付けます。そして何と弟子たちの到着前に、そこに集まっていたのです。弟子たちは多くの群衆が待ち構えているのを見て何と思ったでしょうか。せっかく休もうと思ってここに来たのに、これでは意味がない！と考えて、また別の方向へ向かったでしょうか。しかしイエス様はそうされませんでした。イエス様は舟から上がって、大勢の群衆をご覧になり、「彼らが羊飼いのいない羊の群れのように」であるのを見られました。すなわち導く人がおらず、どこに向かえば良いのか分からずにさまよっている人々、人生の方向が定まらず助けを必要としている人々ということでしょう。イエス様は彼らを深くあわれまれました。これは「内臓が揺れ動く」という意味の聖書にしばしば出て来る強い感情を表す言葉です。ですからここでも「深くあわれみ」と強調して訳されています。その思いに動かされてイエス様は彼らのために仕えられました。ご自身も休息を必要としていたでしょうに、人々の益のためにご自身をささげておられるイエス様の姿があります。イエス様は「多くのことを教え始められた」とあります。他の福音書の平行記事では癒やしのわざも行ったことが記されていますが、ここでは「教え」だけが述べられています。やはりこれがメインであるということです。人々の霊的な必要に応えるのは何よりも教え、すなわち福音であるということです。人々はその言葉に聞き入っていたのでしょう。

さて、そうこうしている内に一つの問題が生じて来ました。それは「すでに遅い時刻となった」ということです。夕方になって来たのです。ここは寂しい場所、辺鄙なところでした。このまま時間が過ぎて夜になれば大変です。そこで弟子たちは「人々を解散させてください」とイエス様に願います。「そうすれば、周りの里や村に行つて、自分たちで食べる物を買うことができるでしょう」と。ところがそれに対するイエス様の言葉は驚くべきものでした。イエス様は何と「あなたがたが、あの人たちに食べる物をあげなさい」と言われます。一体どういうことでしょうか。彼らは答えます。「私たちが出かけte行つて、二百デナリのパンを買い、彼らに食べさせるのですか」と。後にここには男だけで 5000 人がいたと記されます。女と子どもを合わせたら一万人以上いたと考えられます。果たしてこれだけの人々にどうやって食べさせることができるのか。一デナリとは、脚注にある通り、当時の一日分の労賃に相当しました。分かりやすく一日の労賃を今日一万円とすれば、200 デナリは 200 万円になります。一人当たりのパンの費用を 200 円とすれば、確かに 1 万人分ほどになります。弟子たちは瞬時にその計算をしたのでしょうか。しかしこれは現実的ではありません。そもそも彼らは「お金を持たずに宣教旅行に出よ」と命じられた人々ですから、そんな大金を持ち合わせていなかったでしょう。ではなぜイエス様はこのようなことを言われたのでしょうか。イエス様はもちろんご自分がこれからなさろうとしていることをすでに知っておられました。ただそのみわざに弟子たちを参与させようとしたのです。弟子たちは自分たちの力では到底どうすることもできません。だからこそイエス様に目を向け、頼るよう、導かれたのです。彼らは先の宣教旅行では、何も持たずに出て行きながら、神の摂理によって守られる経験をしました。その彼らがここでも大切なことを学ぶようにと導かれたのです。しかし弟子たちは「無理です」と回答しました。イエス様がともにいることを計算に入れず、人間の視点だけで考えて、これは無茶な話ではないでしょうか？と答えたのです。

そんな彼らにイエス様は言われました。「パンはいくつありますか。行つて見て来なさい。」 弟子たちが見つけたのは、パンが 5 つと魚が 2 匹。普通に考えたら全く足りない量でしかありません。ほとんど無に等しいと言って良いでしょう。かえって落胆するような結果でした。けれどもイエス様の応答はそうではありませんでした。イエス様はガッカリし、ため息をついて、これではさすがにダメですとは仰いませんでした。むしろこの小さいものを用いて、大きなみわざを行われたのです。

イエス様は皆を組に分けて、青草の上に座らせるように、弟子たちに命じます。これは明らかに食事のための準備です。そういう意味でこれは弟子たちの信仰を試すものでありました。この状況で、人々をそのように座らせることに何の意味があるのでしょうか。彼らがイエス様に信頼していなかったら、こんなことはナンセンスだと抗議したでしょう。しかし彼らはイエス様の言葉に従いました。人々は100人ずつ、あるいは50人ずつまとまって座りました。そしてイエス様は5つのパンと2匹の魚を取り、天を見上げて神をほめたたえます。「これしかない」と嘆くのではなく、「これがある」と感謝されたのです。そしてパンを裂き、人々に配るようと弟子たちにお与えになりました。普通パンを裂いたら小さくなるばかりで、人々に配るほどのものにはなりません。しかしどういうわけか、それはイエス様の手の中で増えて行きました。二匹の魚も同じでした。

その結果、人々は「みな、食べて満腹した」と記されています。少し口にした程度ではなく、人々はたらふく食べたのです。さらにパンの余りを集めると、12のかごが一杯になりました。最後にパンを食べたのは男が5000人であったと記されています。

さて以上の箇所は私たちに何を語ろうとしているのでしょうか。以下、三つの点に注目したいと思います。第一に、今日の箇所はイエス様がまことの良い羊飼いであることを示しています。34節に「羊飼いのいない羊の群れのようにであった」という表現がありましたが、その背景となるみことばが民数記27章17節にあります。そこではモーセが天へと召されることが告げられた後、モーセが主に願います。「主の会衆を、羊飼いのいない羊の群れのようにしないでください。」　モーセは自分が取り去られた後に、民がそのような状態にならないことを願ったわけです。その願いに対して主はヨシュアを立てると約束されました。このようなモーセまたヨシュアが指し示す「まことの羊飼い」がイエス様であるということです。エゼキエル書34章23節：「わたしは、彼らを牧する一人の牧者、わたしのしもべダビデを起こす。彼は彼らを養い、その牧者となる。」　イエス様がまことの牧者であることは、今日の箇所最初の弟子たちへの配慮においても示されていました。また群衆を見て深くあわれみ、ご自身をささげて仕えられた姿にも示されていました。ヨハネの福音書10章10～11節：「わたしが来たのは、羊たちがいのちを得るため、それも豊かに得るためです。わたしは良い牧者です。良い牧者は羊たちのためにいのちを捨てます。」　まさに群衆を見て、

「羊飼いのいない羊の群れのように」思われて、彼らのためにご自身をささげて仕えられたお姿の内に、イエス様が「まことの良い羊飼い」であられることが示されています。

第二にこの箇所は弟子たちの訓練について語っています。イエス様はみわざを行われる際、ただご自身でなさったのではなく、「あなたがたがしなさい」と言われ、弟子たちをその働きに加えられました。彼らは傍観者ではなく、主とともに働く者として召されたのです。とは言え、この時の弟子たちはまだ理解が足りず、鈍い応答しかできませんでした。実際、このあとの箇所でも益々そうであることが明らかにされます。しかしそれでも彼らは今日の箇所でも結局用いられています。グループ分けをして人々を座らせたり、パンや魚を配ったり、余りを集めたり——こうして彼らは主の手足となって働いたのです。

そんな彼らがここで学んだこと——それは主は小さいものを大きくして、ご自身のみわざのために用いてくださるということでしょう。私たちも色々な課題や必要を前にして、自分が持っているものは少ないと嘆くかもしれません。これだけしか自分にはないと。5000 人の大群衆を前にして 5 つのパンと 2 匹の魚しかなかった弟子たちのように。しかし、主はそれを用いて驚くべきみわざをなすことができます。ですから私たちは自分の持てるものが少ないから何もできないと思ってはいけません。あるいは私たち自身、こんなちっぽけな者では何の役にも立たないと思ってはならないのです。私たちが持つ小さなもの、あるいは小さな私たち自身を、イエス様の手の中へとおさげする。そうするなら主はそれを何倍にも大きくして、ご自身のみわざのために用いてくださるのです。このイエス様に目を上げ、祈りをもってより頼み、自らをささげて従う者であるように！そのことも今日の箇所は私たちに教えているでしょう。

そして第三に今日の箇所は、イエス様こそ旧約から約束されて来た終末的祝宴を主宰するメシアであり、この箇所はメシアの祝宴を先取りするものであることを示しています。三つの箇所に触れたいと思いますが、まず何と言っても今日の箇所と関連するのは、イスラエルが荒野でモーセを通してマナを与えられ、養われた出来事です。彼らがあの荒野で、何もないところで養われたように、ここでも群衆は寂しい場所で、イエス様によって養われました。つまりこのイエス様は、あのモーセが指し示してい

た方であり、私たちの人生の荒野においても養いと満たしを与えてくださるまことの救い主・メシアであるということです。

またがやがて神が終わりの日に祝宴を開いて、民に豊かに食べさせ、祝福して下さることについてはイザヤ書 25 章 6～9 節で次のように預言されていました。「万軍の主は、この山の上で万民のために、脂の多い肉の宴会、良いぶどう酒の宴会、髓の多い脂身とよくこされたぶどう酒の宴会を開かれる。この山の上で、万民の上をおおうべールを、万国の上にかぶさる覆いを取り除き、永久に死を呑み込まれる。神である主は、すべての顔から涙をぬぐい取り、全地の上からご自分の民の恥辱を取り除かれる。主がそう語られたのだ。その日、人は言う。『見よ。この方こそ、待ち望んでいた私たちの神。私たちを救ってくださる。この方こそ、私たちが待ち望んでいた主。その御救いを楽しみ喜ぼう。』」 このように神は終わりの日に、ご自身と民との交わりを完全に回復し、民は大いなる祝宴に招かれて、その幸いを豊かに喜び楽しむと言われていました。その約束がついにここに成就し始めたということです。もちろん、これはまだ完成ではありません。しかし、人々が「みな、食べて満腹した」と記されていた通り、メシアの祝宴がもたらす豊かさの前味がここに示されています。

そしてもう一つこの箇所を読む人が、特に 41 節を読んで思い起こさずにいられないのが、この後の聖餐式制定における主のお姿です。マルコの福音書 14 章 22 節：「イエスはパンを取り、神をほめたたえてこれを裂き、弟子たちに与えて言われた。」 イエス様が人々をメシアの祝宴に招き、祝福を与えることができるのはなぜでしょうか。それはイエス様が私たちの代わりにご自身を十字架上にささげて、私たちの罪の贖いを成し遂げてくださったからです。そのイエス様を信じ、感謝して受け取る時に、私たちは神の国の祝宴——約束されたメシアの祝宴にあずかる者とされるのです。このような御言葉とのつながりの中で、今日の箇所は私たちに語っています。イエス・キリストこそまことの良き羊飼いであり、約束されたメシアの終末的祝宴へと私たちを招き、養ってくださる主であられるということ。

ですから私たちもあらゆる状況において、この方を仰ぎたいと思います。私たちも今、荒野のようなところにいるかもしれません。何もない状況、あるいは乏しい状況にあるかもしれません。しかしそのただ中で私たちを配慮してくださる方がおられます。ご自身がホストとなり、私たちを養い、豊かに満たしてくださるお方です。そう

いうお方が私たちに与えられていることをどんな状況でも仰ぎたいと思います。と同時に、主はご自身のみわざのために私たちを用いようとしておられることも覚えたいと思います。たとえ自分の持てるものが少なくても、あるいは自分自身が小さくても、主はそれを何倍にもして用いることができます。その主を見上げて、つぶやくのではなく、むしろ主を信じて自らをおさげしたいと思います。そのようにする時、主は私たちの歩みの中で、メシアの終末的祝宴の前味を何度となく経験させてくださるでしょう。そしてやがて来る究極のメシアの祝宴に私たちを招き入れ、豊かに満ち足りる者としてくださる——そのことを心から楽しみに待ち望みながら、まことの羊飼いなる主に信頼し、従う歩みを励まされて行きたいと思います。